私見「西岡市長の市政運営の現段階」

2016年２月11日(木)
日本共産党・板倉真也

昨年12月に市長選挙が行なわれ、民主党と保守層の応援を受けた西岡真一郎氏が当選した。２カ月が経過し議会も開かれ、西岡市政の現状が徐々に見えはじめている。西岡市政はどうなっているのか、どんな道を歩んでいくのか。西岡氏が選挙戦で掲げた政策も見ながら、現状と今後を見てみることにする。なお、あくまでも板倉真也個人の見方である。

市長選挙
12月６日(日)・告示
13日(日)・投票

候補者、得票・率		応援議員	
西岡慎一郎(46歳)	12,849票（33.18%）	鈴木、岸田、篠原	３人
五十嵐京子(65歳)	10,048票（25.95%）	中根、遠藤、中山、湯沢、吹春、露口、宮下、紀、渡辺、小林	10人
白井　亨　(40歳)	10,045票（25.94%）	森戸、板倉、関根、水上、田頭、林、片山、坂井	８人
岩渕美智子(60歳)	5,786票（14.94%）	渡辺、斎藤、百瀬	３人

■基盤は保守層

右表でわかるように、保守政党を渡り歩いている。市議会議員時代(1997年～2005年)は稲葉市長の与党。福祉・教育の充実求める質問を行なったとの記憶はなく、「職員削減」を常に求めていた記憶の方が強い。民主党公認で都議会に立候補するとは想像もできなかった。
民主党を離党した時には市長選挙への立候補の意思を固めていたと考えられ、民主党支持層のみならず、保守層の票もあてにしての離党と思われる。

市長選での推薦団体
小金井市都市農政推進協議会
東京都商工政治連盟小金井市支部
小金井市薬剤師会
東京連合

政党を渡り歩く
自由民主党本部事務局職員
新党さきがけ本部事務局職員
市議会議員２期（無所属）
都議会議員２期（民主党）
民主党離党(2015年６月)
小金井市長(2015年12月18日～)

■議会の与党は３人。議長以外は経験数少ない議員

与党がこれほど少ない市政は、お目にかかったことがない。選挙公報の「ゴミ処理経費はムダ使い」で辞任した佐藤和雄氏の場合でさえも、与党議員は５人(青木、野見山、片山、漢人、田頭)であった。西岡市長の与党は、民主党の鈴木成夫氏(２期目)と岸田正義氏(１期目)および、改革連合の篠原ひろし氏(８期目)のみ。篠原ひろし氏は議長のため、西岡市長の支え役として各会派を走り回るわけにもいかない。しかし民主党の２人は経験不足。何をどうして良いのか、わからないでいるのが実態だと思われる。

■副市長・教育長・管理職は前市長時のまま

市長には、補佐役の副市長(１人)がいる。しかし、副市長をはじめ教育長、部長などの理事者・管理職者は、稲葉市政時代に稲葉市長が布陣した体制。西岡市長を支えるために布陣した体制ではない。かといって、人事の組み直しが行なわれる４月を待たずに体制変更を行なえば、混乱だけが生じる。稲葉市政時代の体制そのままに３月定例議会を迎えなければならないのが、西岡市長の辛いところである。

なお、西岡市長の推薦団体には「東京連合」がいる。小金井市役所の組合「小金井市役所職員組合」の上部組織「自治労東京」は、東京連合に加盟している。理事者や管理職者を西岡市長の意に沿う人物に置き換えようと思うならば、それは可能であろう。ただし、その職に就こうという職員は、少数与党という「火中の栗」を拾う覚悟が必要となる。市政運営は相当に難しくなることが予想されるからである。

■施設の複合化以外は稲葉前市政と基本的に変わらず

西岡市長の政策と稲葉孝彦市長の政策の相違点は何か。市長選チラシを見るかぎりでは、幅広い支持を獲得できるように「総花的」に施策を網羅している。ある意味では、どの候補も言うようなもの。そのうえで“市役所職員はもっと能力をつけてほしい”“民間と比べて、公務員は優遇されている”などの市民感覚を意識した施策を打ち出しているのが特徴。例えば「目的を明確にした庁内プロジェクトチーム設置」「民間企業も含む幅広い人事交流・派遣研修、実践的な研修制度確立による市役所活性化」「民間有識者によるシンクタンクとして経営懇談会設置」など。ここには、政府の『民間活力導入』を意識したものも見受けられる。

また、『市民参加』の行政運営をうたっているのも特徴。「政策立案から実行までを担うドゥタンク、市民協働センター設置」「プロポーザル型市民事業の募集」など。『民間活力導入』や『市民参加』はすでに稲葉孝彦市長時代に「行革」でうたわれていたものであり、その具体策を打ち出したもの。

一方、西岡市長は、さらなる駅前開発、職員削減、事業の見直しを公約している。基本は「まちづくりで税収アップ」「職員削減、人件費削減で事業費捻出」「事業の見直しで新たな事業展開」というもの。西岡市長は、武蔵小金井駅北口開発にも積極的だと言われている。この市政運営を、政策立案段階から、民間有識者や市民を交えて具体化しようという流れになっている。民主党政権時代の『事業仕分け』を、市長の意に沿う「民間」や「市民」を交えて行なうというにすぎないのではないだろうか。

駅前開発を推進し、その財源確保や借金返済のために市民施策の見直し・削減、負担増、民間委託化を行なってきた稲葉孝彦市

長時代と、はたしてどこが違うのか。

■最初の関門は３月定例市議会

西岡市長は、目前に控えた３月定例市議会で最初の関門を迎える。佐藤和雄市長(2011年４月～2011年11月)もそうであったが、最初の議会は「公約」に対する質疑が否応なしに展開される。施政方針への質疑と一般質問(各議員が１時間ずつ)がその場になる。

注目されるのは、少数与党のもとで、どのような施策(年間予算)をうちだしてくるのかという点。従来の稲葉孝彦市長時代の与党(自民・公明・民主)が許容できる施策にするのか、それとも民主党のみが賛成の構図を描くのか、はたまた、稲葉孝彦市長時代の野党側に配慮した施策に切り換えるのか。

議会筋からは“自民・公明側からも、共産党側からも予算修正が出され、西岡市長は修正協議に応じざるをえない。そうしないと予算が可決されないから”と、高みの見物的な発言をする者もいる。いずれにしても、２月15日に配布される議案・資料に注目が集まる。

３月定例市議会(２月22日開会)

★施政方針への質疑(２月28日)
★各議員の一般質問
★年間予算の質疑(４日間余)
★常任委員会、特別委員会質疑

■少数与党のもと今後、どのような施策を打ち出していくのか

すでに見たように、西岡市長の公約は、稲葉孝彦市長時代の政策と大差なく、いっそうの「行革」「まちづくり」をすすめるものとなっている。大きく異なるのは、１月27日から途切れ途切れに開かれている市議会全員協議会での『福祉会館の建替え』における「場所」と「複合新庁舎方式」くらい。その部分に触れない予算であれば、自民党や公明党の賛同を得ることができるものとなる。

しかし一方では、こんな見方もある。今回の市長選挙は「西岡陣営」「五十嵐陣営」「白井陣営」「岩渕陣営」の対決ではあったが、「西岡陣営」と「五十嵐陣営」の対決の背景には「菅直人」「土屋正忠」が控えており、衆院東京18区(小選挙区)の代理戦争でもあった ――― 。となると、たとえ自民党や公明党の賛同を得やすい年間予算を組んでも、そう簡単に「賛成」とはならないのではないか。もしそうであれば、西岡市長は相当に苦労することになる。

■西岡市長デビュー議会で「予算撤回」

西岡市長の初めての議会となる「臨時市議会」が１月22日に開かれた。案件は補正予算。さわらび学童保育所(第四小学校区域)の委託事業者の都合で、わずか１年で委託契約を解除することになったことから、今年４月から別の事業者に委託替えするための予算である。

議会側の論点は以下である。「サービスを充実させるためにとの理由で委託化したのに、わずか１年で撤退することになった要因は何なのか」「委託をすること自体に問題はなかったのか」「そのことを市役所内部で検証もせずに、別の事業者に委託するとは何事か」「再度の委託化は、さわらび学童保育所の保護者の理解を得ていない」「西岡市長の公約は、市民との対話ではなかったのか」など。議員からは、関係する資料提出が求められた。１月22日の臨時市議会は、日付をまたぎ23日未明まで続いたが、結論が出ず、２月２日へと持ち越しとなった。

１月22日から10日を経た２月２日に、臨時市議会が再開された。しかし、要求された資料が提出されていない。議長は「要求資料が整わないなかで、現状は質疑に入れない。採決に至るのは困難と判断する。市長は対応を検討すべき」と発言し、休憩に入った。午後１時前に再開された本会議で、西岡市長は議案の撤回を表明し、公明党のみ退席で「撤回」は承認された。しかし西岡市長は、さわらび学童保育所を来年４月から再度、委託化すると発言した。

「予算撤回」の背景に何があったのか。西岡市長は「職員削減」を公約に掲げている。「民間でできるものは民間に」という考え方である。だから「さわらび学童保育所の委託継続」は当然となる。一方で「市民との対話」を公約に掲げている。しかし、さわらび学童保育所の保護者の理解を得ていない。４月からの委託事業者変更をうたう補正予算が、矛盾のなかに置かれてしまった。

市長を応援した篠原議長も、困ったのではないか。“議会側の主張はうなづけるところがある。今回の補正予算は拙速すぎた”。採決をすれば、委託化を推進する議員が多数を占めるので可決される。しかし、西岡市長の公約に齟齬をきたし、西岡市長を見る市民の目線も考えなければならない。小金井市の計画では、来年４月からは「ほんちょう学童保育所」と「みなみ学童保育所」を委託化となっている。学童保育所の保護者の不信感を買ってしまっては、計画が進まなくなる。ひとまず撤回し、環境が整うのを待つべし ――― 。こんな思いではなかったか。いずれにしても、スタートから自身の公約の狭間で右往左往する西岡市長であった。

■自民・公明の狙い目とは

以上、見てきたように、西岡市長の公約は、基本的には自民党、公明党の許容範囲といえる。しかし、五十嵐陣営にいた側としては、「与党」になるわけにはいかない。議案、予算ごとに判断し、場合によっては西岡市長に譲歩を求め、自民・公明が求める施策・事業を組ませることで「賛成」を投じるというスタイルで行くと思われる。つまり、自民党、公明党のてのひらに乗る市政に誘導していくということである。

■日本共産党市議団の立ち位置

日本共産党市議団は、これまでどおり、「良いものは賛成」「ダメなものはただしていく」の姿勢で臨んでいく。

以上。